

チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解

——「バークリーでの朗読」——

平 野 順 雄*

An Essay on Charles Olson's "Reading at Berkeley" in *Muthologos*

Yorio HIRANO

キーワード：『ミュソロゴス』 *Muthologos*

バークリー詩人会議

Berkeley Poetry Conference

チャールズ・オルソン

Charles Olson

「バークリーでの朗読」

"Reading at Berkeley"

ブラック・マウンテン派詩人

the Black Mountain poets

チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』(Charles Olson, *Muthologos*, 1979)とは、『マクシマス詩篇』(*The Maximus Poems*, 1975)の著者であるチャールズ・オルソン(1910-70)が、1963年から1969年にわたって行なった合計13の講演、対談、座談、インタビューを集めたものである。

カリフォルニア大学バークリー校(University of California at Berkeley)において、詩人会議(Poetry Conference)が行なわれたのは、1965年7月12日から24日にかけてである。

オルソンは、7月20日に「気軽な神話学」("Casual Mythology")の講演をし、7月23日に詩の朗読をしている。オルソンの他に講演と詩の朗読をしたのは、ロバート・ダンカン(Robert Duncan)、ジャック・スパイサー(Jack Spicer)、ゲーリー・スナイダー(Gary Snyder)、エドワード・ドーン(Edward Dorn)、アレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg)、ロバート・クリーリー(Robert Creeley)であった。

本稿の目的は、チャールズ・オルソンがバークリー詩人会議において行なった詩の朗読がどのようなものであったのかを紹介することである。そのためにはオルソンが朗読した詩と、詩の朗読の合間に挿入される語りの部分との両方を見ておかなければならない。

この論考では、(1)オルソンの朗読した7篇の詩を精読し、(2)これらの詩がどこへ向かおうとするのかを確かめておく。次に(3)朗読の合間に挿入される語りの部分では、何が語られるのかを記述する。(4)上記の作業を通じて、「バークリーでの朗読」は聴衆にとってどのような体験だったのかを考察する。

*人間関係学科 教授

I. 朗読された詩

オルソンが朗読した詩は、“The Ring of,” “An Ode on Nativity,” “Letter 5,” “Letter 2,” “Letter 9,” “Letter 10,” と “On first Looking out through Juan de la Cosa’s Eyes” の七篇である。これらの一篇一篇がどこへ向かうのかを確かめておこう。

i. 「…の環」 “The Ring of”

比較的短い詩で、行頭がほとんどすべて小文字になっているところに形式上の特徴がある。

かの女を捕らえたのは西風、それは
かの女が
生殖器の波から
出てきた時のこと、西風はかの女を
繊細な泡から運んで行った、かの女の
故郷の島へ

すると、難しい物を愛する
人々と、黄金の日の時間たちが
かの女を歓迎し、服を纏わせた、彼らはまるで
自分たちが、かの女を作ったかのように、夢中になっていた
この新しいものを誕生させるのに
海の環の中から、ピンク色で
裸の、この娘を、かの女を
神々の面前に連れてきた、かの女の髪の毛の
紫が

美しかった、かの女は
ゼウスにも、神々にも否と言った、皆だめですと
そしてかの女が共にベッドへ行く相手として選んだのは
一番醜い者だった、それが正直なやり方だったのだろうか
美の本質をつぐなう方法だったのだろうか？

ともかく、時間たちを知っていたので
かの女は長居しなかった、つまり一部
足が不自由だったとはいえ、立派な
マルスがかの女を我が物とした 子どもは
同じ名前を持ち、弓は
飛翔のようであり、その子の母の
動きは、ギンバイカで

イルカと言葉を飾る動き

イルカと言葉は立ち上がる、
類似した要素から
生まれたイルカと言葉は

(98-99)

この詩は、ジョージ・F・バタリック編『チャールズ・オルソン全詩集』(*The Collected Poems of Charles Olson*, Ed. George F. Butterick, 1987)によれば、1951年10月に執筆され、『冷たい地獄』(*In Cold Hell*)に収められたものである(654)。

海の波から誕生した美しい女神の様子が描かれる。この女神がゼウスを始めとして居並ぶ神々を自分の相手としては認めず、最も醜い戦いの神マルスをベッドへ誘い、子を儲ける。その子の弓の腕前とイルカや言葉を飾る美しい女神の行為とが、論理や文法を超えたところで睦み合うように描かれている。最終6行をご覧ください。文を構成する途中で、構成を放棄したような書き方に見えるだろう。女神もその子も人智では測りえない営みをしているようである。

「ギンバイカで／イルカと言葉を飾る」とは、「イルカ」の方は分かっても「言葉」を「ギンバイカで飾る」とはどのようにするのか想像を絶している。また、どのような意味を持つのかも分かり難い。

また、最終3行「イルカと言葉は立ち上がる／類似した要素から／生まれたイルカと言葉は」にしても、イルカと言葉が本当に類似した要素から生まれたのか、読者は理解に苦しむだろう。

女神の行為を語る部分は、詩の終結部となるより、新たな物語の導入部に相応しいのではないと思われる。だが、新しい物語の展開がなされることはなく、詩は閉じられる。この世ならぬ生まれ方をした女神が、神々の中で最も醜い軍神マルスと愛を交わすところに高いものが低い者のところへ降りてくるという主題が見いだせる。また、その結果生まれた子供が、戦の神の息子に相応しく弓に秀でていることは物語の理屈に合う。女神は自らの誕生した海の波と関係のある「イルカ」をギンバイカで飾り、また「言葉」をも同じ植物で飾るという箇所は解釈の難所であるが、だんだんと人間の世界に近づいてくると考えればよいと思われる。

次の詩を見よう。

ii. 「キリスト降誕の頌歌」“An Ode on Nativity”

『チャールズ・オルソン全詩集』によれば、1951年12月に書かれた詩である(654)。

「この世ならぬものの誕生」という主題が i. “The Ring of” と共通しているが、上で見た “The Ring of” がギリシャ神話を主題としているのに対して、この詩はキリスト誕生を主題とし、時代が下っている。

これは少々長い詩なので、一気に全体を読むのではなく、4節からなる詩の第Ⅰ節と第Ⅱ節をまず読んでみる。その後に適宜省略を加えつつ、残るⅢ、Ⅳ節を概観する。この詩も「…の環」同様、行頭がほとんど小文字になっており、行頭以外でも通常は大文字で始められるハロウィーンなどの語もすべて小文字で書かれている。

I

全ての叫び声上がる、そしてわれわれ三人は
見る、オリオン座が素早く

真夜中を告げるのを
空の
頂きで

その間に月の舟が
赤く南西に沈みかかる
月の球面が、かつて、この少年には赤く見えたように、
それは、初めて少年がハロウィーンの時の月の顔を隈なく北東に見た時のこと
少年が氷まで降りて行ったとき、スケートをする池の向こうに見えたのだ、12月に
彼が7歳の時だった。

冬は、この地帯では
ついたり、消えたりするもの、この地帯では空気が
時々、氷のように輝くのだ
空の明かりが…鴨だけが
氷の上を滑る時に

そして幼子キリストの入った馬槽^{うまぶね}は
商業主義だ

(同じ年に、火の玉が
同じ場所を一まさに同一の
木々を通ったのは
火だった。

ソーヤー材木会社の貯木場は
苦痛の月だった、その終わるところで、
私は燃える馬たちが死んでいくのを見ていた
床板を何枚も踏み抜いて
埋められたブラックストーン川へ落ちて行った
市が地下に隠した川が、増水していたのだ

いつでも、そしてこの時
市は
じゃんじんと音を鳴らす

男の輝きは
どの生まれかの
問題だ

(Collected Poems 245-46)

東方の三博士を思わせる三人が登場し、キリストの誕生を待ち望んでいるように見えるが、それは、冒頭の5行に留まる。キリストの誕生よりも前景化されるのは、月、それも赤く見える月に関する思い出である。赤い月は、第一に角度その他の関係で赤く見える月を意味しているが、第二に大火事と結びつく月を意味している。この詩は、12月の赤い月と、12月生まれな

のでこの12月に7歳になる少年との関わりを軸として進行するのである。

キリストの誕生にちなむ「幼子キリストの入った馬槽」(“the crèche”)はむしろ、「商業主義だ」として非難の対象になっている。そのようなものより、七歳の少年が体験する赤い月の方が重要なのである。スケートをするために行った池の氷の向こうに見える「赤い月」や、冬らしい冬になったり、そうでなかったりする少年の生活の場、ソーヤー材木会社を襲った火の玉による被害の数々、とりわけ馬が焼け死んでいき、地下水路にしたはずのブラックストーン川に落ちて行く、想像を絶する災禍が描かれる。

ところで、12月生まれで七歳になった主人公の少年は、12月27日生まれのオルソンその人であると考えられる。だから、この詩はキリストの誕生を描くタイトルを持ちながら、実は、7歳になった少年オルソンの誕生日を謳う詩なのである。とはいえ、オルソンが自らをキリストになぞらえているのではない。ハロウィーンの過ぎた頃のキリストは、「商業主義」の片棒を担がされていると喝破したのだから、オルソンがキリストに自らをなぞらえるはずはない。

最終3行は、唐突である。それほどに読者は、この詩のタイトルの意味から遠ざけられてきたと言うべきかもしれない。「キリスト降誕の頌歌」だから、誕生が問題になって当然なのである。この頌歌が書かれるのも、キリストの誕生を祝うからに他ならない。「男の輝きは／どの生まれかの／問題だ」は、キリスト生誕を祝う簡潔この上ない詩句として受け取るべきである。

Ⅱ節を見よう。

Ⅱ

叫び声が上がる、するとわれわれの一人が
燃える夜空を見る眼さえ
なくす、あるいは霧の
入り江に出来たくぼみさえ、それに納屋を覆う
霜も、その夜何も見なかったのだ。われわれ二人だけは
真っ暗な公道を進んでいき、沈みながら揺れる月の
様々な姿をすべて見た

この年の12月は、
新しかった、その場所で私が低い声で
囁くと、池は再び
岸辺まで満たされた、水が充満していたので
月をよくよく見ることが出来た、一か月前なら草のせいで
月は見えなかっただろう、鴨たちが声を出している
私の娘が声を出すように、鴨たちは活動している
色々な物の入った馬槽の中で

(彼の母親は、80歳、埋葬した後、
われわれはカキを食べた。彼の女きょうだいと一緒に
跪いた、今はメアリー・ジョセフィーヌとなっている女性と

修道院で祈ったのだ
私の母と父が結婚した教会で

メアリーはわれわれに私の家族の話をしてくれた
聞いたことのない話だった、私の祖父が
狂ったように緑の草地を駆け回ったという
今は地下を流れる川の堤の上で
製鋼所の火から身体を冷やすためだった
服を脱いで赤い下着姿になっていたという

メアリーは陽気だった、娘と会えたからだった
われわれ二人には、あの自動車があったので
シスターたちを町を中心地へ送っていき、用事があると言う所で、
降ろしてやった

黒い衣服を着た彼女たちが
旋回するように遠ざかっていくのを見ていたが
やがて、私は再び自動車を走らせて
通りの雪の中へ入っていった、その通りは
父に連れられて、初めてキャップを買ってもらった通りだった

いつでも、そして今、再び、この新しい年に
あなたが生まれた場所は、たとえ都市でも、鳴り響いている

調子が合ったり
外れたりだが

娘の二度目の
誕生日は
どんなふうだろう？

(Collected Poems 246-47)

I 連から 2 連で最も注意すべきことは、三人で一団となっていた「われわれ」の一人が欠け、二人になっていることである。その理由は、その一人が「燃える夜空」や、「霧の入り江に出来たくぼみ」や、「納屋を覆う霜」を見る眼をなくしたからだ。それは視力をなくしたという意味ではない。見えなくなったのではなく、見る気がしなくなったのだ。それは、「その夜何も見なかったのだ」という詩句に良く表われている。その一人は、われわれが見ようとする対象を意志によって「見なかつた」のである。離れて行った一人が、何を目指して「われわれ」二人と袂を分かつたのかは、書かれていない。しかし、われわれ二人が見る物に対して意味を見出さなくなったのだとすれば、この一人は自然の風景ではなく、超自然に惹かれるようになったと推察できる。

「われわれ」は二人になったが、この日の体験は充実している。「沈みながら揺れる月の様々な姿をすべて見た」のだから。しかも、「私が囁く」と「池は岸辺まで満たされ」、充滿した水面に映る「月」をわれわれは存分に見ることができたのである。それだけではない。

I 節では「馬槽の中に入った幼子のキリスト像」は、「商業主義」だとして軽蔑的になったのであったが、II 節では「幼子キリスト像の入った馬槽」は、「私の娘」や「鴨」のように声を立てるものを入れる容器として機能している。幼子キリストを入れるばかりでなく、宗教や聖性と直接的には関係のない野生の鳥（「鴨」）や幼女（「私の娘」）を許容する懐の深い物に変容している。「馬槽」は、「鴨」の活動を慈しんでいるようにさえ見える。

確かに「この年の12月は、新しかった」のだ。「馬槽の中の幼いキリスト像」は、人間や鳥の根源的ではあるが、ささやかな営みを抱きとめようとしていることが分かったのだから。

3 連から 6 連は物語性が強いので、一見読みやすい。しかし、人称代名詞が指すのは誰かを特定するのは思いのほか困難である。指示対象が特定困難な人称代名詞とは、3 連冒頭の「彼」と 6 連直後の「あなた」である。

「彼」は、二人になった「われわれ」のうち、「私」でない人、すなわち「私の同行者」であると考えておく。すると 3 連から 6 連までのおおよその意味は以下ようになる。

「彼」（私の同行者）の母親が 80 歳で他界した。埋葬した後、「彼」と私は、カキを食べた。「彼」とその女きょうだいメアリー・ジョセフィーヌと、「私」は修道院で跪いて、祈った。その教会は「私」の「母と父が結婚した教会」だった。以上が 3 連の内容である。

他界した人を埋葬した後で「カキを食べた」ことを書く必要があるかどうかは分からない。

しかし、「彼」の母の死と埋葬に、その後に食べた「カキ」が強く結びついていることは、間違いない。重大な出来事（友人の母の死）を、人は一見ささいなこと（カキ）と共に記憶する例だと考えられる。この箇所を読む者は、80 歳で他界した「彼」の母親の埋葬よりも、埋葬後に「彼」と「私」が「カキを食べた」ことの方を鮮やかに記憶するだろう。

「彼」の母親と「私」との間にどのような交流があったのかが書かれていないため、読者は、「彼」の母親が 80 歳で他界し埋葬されたことに対して、特別の感慨を持つことがない。不謹慎な言い方になるが、「彼」の母親の死と埋葬は、「彼」と「私」が「カキを食べる」ことの背景としてのみ機能するのである。ここまでの読解の途上で、われわれが見落としていたことがある。「カキを食べた」のは、「彼」と「私」だけとせず、「彼」の女きょうだいメアリー・ジョセフィーヌを加えるべきであった。詩の記述通りに取ると、メアリーは祈りの時点から登場するのだが、「彼」とその「女きょうだい」メアリーと私の三人で、埋葬をし、跪いて祈り、その後に埋葬後の食事をしたと取る方が妥当であろう。

祈った教会が「私の母と父が結婚した教会」であったことは、「彼」の家族と「私」の家族とが互いに同じ教区の住人であることを示す。二つの家族の近しさは、次の 4 連と関係する。4 連でメアリーが語るのは、「私」が「聞いたことのない話」だった。

「私の祖父」は「製鋼所の火」で熱くなった身体を「冷やす」ために「狂ったように緑の草地を駆け回った」。「赤い下着姿」になり、「今は地下を流れる川の堤の上」にいたのだとメアリーは語る。彼女は製鋼所で働く「私の祖父」が、熱した身体を冷やすためにどのようにもがいていたかを見ていたのだ。メアリーの話を通じて、「私の祖父」が過酷な仕事に命を削りながら従事していた様子が、目に見えるように分かるのである。「赤い下着姿」については、分からない。「緑の草地を駆け回った」ために血で下着が赤くなったのか、あるいは、熱から身体を守る機能を持った下着が赤いのか、不明である。

このⅡ節でも、Ⅰ節同様、「火」が鍵になっている。Ⅰ節の「火」は材木会社の火災で、惨たらしく馬を燃やしたが、Ⅱ節の「火」は製鋼所の火で、人間が産業のために用いる火である。「祖父」はそこで働く限り、「火」に晒される。「祖父」が身体を冷やす川は、Ⅰ節と同じブラックストーン川である。「祖父」が製鋼所で働いていた当時、まだブラックストーン川は「地下を流れる川」ではなかった。そういう歴史的な厚みが見られる。

「彼」（「私」の同行者）とその女きょうだいメアリーと共に食事をとった時に、メアリーが「私の祖父」の話をした。「彼」の母親の埋葬の後に、メアリーの口から「私の祖父」の生活の断片が鮮やかに語られたのである。「私の祖父」の世代、「彼」の「母親」の世代、そして「彼」とその女きょうだい、そして「私」の世代。これで三世代になる。「私」には娘がおり、5連ではメアリーに「娘」がいることが示されるので、四世代にわたる二つの家族が詩で言及されていることになる。

Ⅰ節では七歳の少年だった「私」が、Ⅱ節では「娘」をもつ父親になっていることにも注意するべきだ。Ⅰ節とⅡ節のあいだには20年以上の月日が流れているのである。

5連と6連に描かれているのは、「彼」の母親の埋葬を済ませ、「彼」の女きょうだいメアリーと共に食事をとった後の「私」と「彼」との行動である。葬儀の機会に「娘と会えた」ので、「メアリーは陽気」だった。悲嘆の場で陽気になる人もいるという、良く目にする場面である。「われわれ二人」すなわち「彼」と「私」は、埋葬に関して手を貸してくれたシスターたちを自動車で送って行った。ここまでが5連である。

6連は、自動車から降りたシスターたちの後姿を見送るわれわれの眼から見た情景描写である。「黒い衣服」の彼女たちが「旋回するように遠ざかって行く」のを見届けた後、「われわれ」の自動車は「通りの雪の中へ」入って行くのだが、不意に過去の思い出が蘇る。

「その通りは、父に連れられて、初めてキャップを買ってもらった通りだ」と。「彼」の家族と「私」の家族との住居が近いために、思い出が交錯する。「彼」の母の葬儀は、「私」の父と母の結婚した教会で執り行われ、「私」が「彼」とともに自動車で行って行った通りは、「父に連れられて、初めてキャップを買ってもらった通り」だと判明するのだ。

これで、3連から6連の内容は概観できた。「彼」の母親の埋葬から始まり、葬儀から散会に至る枠組みの中で、「彼」の家族と「私」の家族との歴史が交錯する、その様が描かれたのである。今は地下を流れるブラックストーン川が地上を流れていた頃に「私の祖父」が火と戦う生活をしていたことは衝撃的である。また、その他のささやかな事柄の細部も興味深い。3連は括弧で始まり、6連の終りで内容的に一つのまとまりを成しているが、括弧は閉じられていない。ちなみにⅠ節でも4連で始まった括弧は、5連で意味のまとまりが成立してもやはり、閉じられていない。こうした閉じられない括弧は、内容的にまとまりのある3連から6連と、それ以後の記述を截然と区別しないための工夫である。

最後にⅡ節の6連以後を見ておこう。2行を単位とする詩句が2つと3行の詩句が一つ配されているが、最初の2行が最も難しい。

いつでも、そして今、再び、この新しい年に

あなたが生まれた場所は、たとえ都市でも、鐘の音が鳴り響いている

この詩句が難しいのは、既に指摘したが人称代名詞の「あなた」が誰を指すのかが分からないからだ。3連から6連の「彼」のことを改めて「あなた」と言い直したのか、あるいは「私」

にとって「彼」より近い誰かを「あなた」と呼んだのかが分からないのである。あるいは「あなた」とは読者のことだろうかなどと考えてみても、やはり分からない。このような事態が生じるのは、6連末の括弧が閉じられていないために、われわれが「あなた」を3連から6連までの延長線上にある人物だと考えるからである。そうではないのだ。「あなた」は、3連から6連の延長線上にあるのではなく、1連と2連との延長線上にある。「あなた」とは生まれたばかりの幼子キリストなのである。したがって、「あなたの生まれた場所」はベツレヘムにある馬小屋の馬槽を指す。すると、難解と見えたこの2行は、幼子キリストの誕生を告げる鐘の音が、常に、そしてこの年も鳴り響いていることに感謝する詩句であることが分かる。

上記2行の解釈が出来れば、残りの4行は難しくない。「調子が合ったり／外れたりだが」は鐘の音に対するコメントで、キリスト教社会では、あらゆる町や都市で鐘の音が聞こえるが、その鐘の音が、「しかるべき音であったりなかったり様々であるが」という意味である。Ⅱ節の最終3行は以下のようなものである。

娘の二度目の
誕生日は
どんなふうだろう？

ここには、今年、初めての誕生日を迎えた「私の娘」の「二度目の誕生日」がどのようなであろうかと、考える「私」の感慨が描かれている。幼子イエスの誕生と、一歳になった娘の翌年の誕生日のことを思う「私」の生活感情がここに出ているのであるが、それとともに「馬槽の中の幼子キリスト」の聖なる光によって娘の「誕生」が、照らし出されているという自覚も、ここには描かれている。聖なる世界と「彼」や「私」や「娘」のいる世界は連続しているのだ。3連から始まった括弧が、6連で閉じられないのは、聖なる世界と「私」の世界とが連続していることを示すためだったのである。

Ⅲ節に移ろう。

Ⅲ

今、あらゆるものが立ち上がる、そして新たに生まれる人々の
叫び声上がる、古い物語とは別に、
(中略)

どんな季節でも、この新たな時においては
不安定なために、われわれの誰もが見逃してしまう
あの幻影を、瞬間と決意を失ってしまう、結末を失ってしまう
結末はこれ以上のものではなく、他のものでもない
それは、あなた方が満足している未だ生まれぬ形であり、あなた方だけが
光らせることができ、似た光を投げることのできるものだ
泥まみれの場所にも。そして今、その表面を
鳴らば、歩くことが出来る。そして私には
その夜の
仲間がいる

この年、この時
魂が外を出歩かない時、人々だけが歩く時

いつ歩くかが大変難しい時

聖なる誘惑者も歩いて
新たなものを提供する時—その選択は

(野蛮な火に

背を向けて、隠れる
あの少年がもう少しで成功したように、身を隠すのだ
恐ろしい顔を見ないで済むように—2度！—その冬

少年は犬か祖父のように転がる
池の端にある雪の堤で

どこかで救いを見出そうとして、火を
避けようとして—草地に行くのだ
彼の娘が今、草に吸い付いている地へ。何か方法が！と叫ぶ
あの馬たちの苦悶を見ないでおくために。

光は、光はあるのだろうか、少しでも
火の代価を支払う
ために

(Collected Poems 247-48)

Ⅲ節は、この詩のタイトル「キリスト降誕の頌歌」(“A Nativity Ode”)が指し示す最も重要な主題に大きく迫っている。それとともに、Ⅰ節とⅡ節で取り上げた主題が、タイトルの示す主要主題に向けて統合されていく様子も分かるだろう。引用の前半と後半を見よう。

引用前半では、「新たな時」が前景化される。今から馬槽で生まれるキリストによって、生じる「新たな時」がどのような時であるのかが、極めて慎重に描かれる。幼子キリストを「未だ生まれぬ形」,「あなた方だけが光らせることが」できるものと形容する箇所がいかに繊細で、温かく、敬虔であるかをご覧ください。Ⅰ節冒頭とⅡ節冒頭の「あらゆる叫び声上がる」(“All cries rise”)には、同音(“ri”)の繰り返しと類似した綴り字(“cries ries”)の並置が見られる。Ⅲ節冒頭も、同音と類似した綴り字によって永遠に円環を成すような“All cries rise”を冒頭行に含んでいる。音と綴り字のこの工夫を一步進めることにより、キリスト降誕の瞬間が更に近づき、人々が息を飲んでいる様子が表現されている。すなわち、“All”と“cries”と“rise”とを分解してⅢ節冒頭を次のような詩行にするのだ。“All things now rise, and the cries of men to be born” (下線は平野)には、Ⅰ節とⅡ節の表現を含みながら、時が円環をなすのではなく、決定的な出来事が起こる瞬間へ向かって進んでいく様子が示されている。

引用後半で、詩は新たな局面に入っていく。キリスト生誕の瞬間が近づくためか、この地上

が霊的な深みと濃密さを持つようになるのである。後半最初の5行「この年、この時」から「新たなものを提供する時」までの5行は、どの行が何を指すかは説明できないが、聖性の濃密な顕現によって、生活空間の全体が霊的なものとの出会いに向かって組織化されていく様子が描かれているように思える。

この5行の大意は以下になるだろう。外を出歩くのは魂のない身体だけで、魂は家の中でキリスト降誕の瞬間を待っている。いつ出歩いたらいいのかさえ分からないのだ。その理由は、「聖なる誘惑者」も外を出歩いており、「新たなものを提供する」から。こう書かれているが、謎めいていて意味が掴みにくい。

最初の5行に比して、6行目以下の括弧の後の数行には解釈の手がかりがある。先行するⅠ節およびⅡ節と関連する語や概念が見いだせるためだ。「野蛮な火」は、Ⅰ節では「ソーヤー材木会社の貯木場」を炎でつつみ、馬を惨たらしく焼き殺した「火」であり、Ⅱ節では、「私の祖父」が「製鋼所の火から身体を冷やす」ために「狂ったように緑の草地を駆け回った」、産業の「火」である。

Ⅲ節では、「あの少年」すなわち、Ⅰ節に登場した「七歳の少年」が、「恐ろしい顔を見ないで済むように」、 「野蛮な火」から「身を隠す」のである。ただし、『マクシマス詩篇』で「恐ろしい顔」といえば、「手紙19」の完全であるがゆえに恐ろしい「神の顔」を指す（*Maximus* 92）。したがって、「野蛮な火」の「恐ろしい顔」は、「神の顔」の一面とも考えられる。

「少年」は、「私の祖父」同様、「雪の堤」で「転がる」。それは「私の祖父」が製鋼所の「火」から受けた熱を冷まそうとして、「狂ったように緑の草地を駆け回った」行為の反復である。また「あの馬たちの苦悶を見ないでおくために」は、材木会社を襲った火事で「燃える馬たちが死んでいくのを見ていた」（Ⅰ節）恐怖を二度と味わいたくないという感情を示している。「少年」が「火」を恐れる気持ちは読者には十分伝わるはずだ。馬を生きながら燃やした「火の玉」（Ⅰ節）や、「私の祖父」の全身を熱で痛めつけた製鋼所の「火」（Ⅱ節）によって、「火」は「少年」の眼に恐ろしいものとして映るに違いない。

一点だけ注意しておきたい。「娘」の存在である。Ⅰ節で、少年であった「私」はⅡ節では、「娘」をもつ父親になっていた。Ⅲ節の「私」はⅠ節の「少年」でありながら（引用後半8行目、10行目）、同時にⅡ節の「娘」をもつ父親「彼」でもある（引用後半14行目）ように書かれている。引用後半14行目の「彼」を「娘」の父親、すなわちかつて「少年」であった「私」ととることに異論を唱える人もいるかと思う。

異論の第一は、「彼」をⅡ節に出てきた「私の同行者」と取ることが出来るというものである。確かにそうなのだが、私の同行者であった「彼」に「娘」がいたとは、これまでに一言も記されていない。「彼」の「娘」が唐突に出てくるという点が弱いのである。異論の第二は、「彼」を「祖父」と取れるというものである。しかし、ここで「祖父」の「娘」を突然前景化する必要はない。前景化されるのは、「祖父」の「娘」、すなわち、「私」の「母」ではなく、「私」の「娘」なのだ。だから、この解釈も取りがたい。

したがって、引用後半は、「少年」である「私」と、「娘」の父親になっている「私」とが同一の時空に存在している様を描いていることになる。Ⅰ節からⅡ節の間に経過した20年以上の時間が、2人の「私」の間で無化されているのである。

最終3行で希求される「光」は、「少年」である「私」と「娘」の父親になっている「私」が二人ながらに求める物である。この「光」が、引用前半で見た聖なる「光」であることは言うまでもない。詩「キリスト降誕の頌歌」はどのように歌い収められるだろうか。

最終Ⅳ節を見よう。

Ⅳ

疑問は残っている
調子はずれな都市に、空は
見えなくなる、今、再び、
裸の冬の時期には。

誕生というものがあるだろうか
別の輝かしいことがあるだろうか
起こっていることの光輝とは別の、われわれ
すべての叫び声上がる場所の孤独とは別の？

(Collected Poems 249)

1 連目を見よう。「調子はずれの都市」は、「私」やその同行者である「彼」の住む町を指すだろう。「調子はずれな」は、Ⅰ節からⅢ節で見たとおり、「火の玉」よって材木会社の貯木場に火がついて、馬が焼け死んだ事件や（Ⅰ節）、「私の祖父」が働いていた「製鋼所」の熱に耐えられず、「草地を転げ回ったこと」（Ⅱ節）を指す。また、少年の「私」が「野蛮な火」を恐れて「祖父」と同じく「草地で転がり」、「私」の「娘」も草に吸い付いている（Ⅲ節）ことなどは、聖夜の時期の異変を表わしている。

「空は見えなくなる」は、聖霊が下りてくる空が見えなくなる、の意であろう。Ⅰ節冒頭では、空ははっきりと見えていた。そこでは「全ての叫び声上がる、そしてわれわれ三人は／見る、オリオン座が素早く／真夜中を告げるのを／空の／頂きで」と歌われていた。ならば「空が見えなくなる」は、聖霊が下りてこなくなる、を意味するのではなからうか。

だから、Ⅳ節冒頭の「疑問は残っている」の「疑問」は、「私」や「彼」の住んでいるような町に、聖夜が訪れるかどうか、幼子キリストが誕生するか否かである。

2 連目は、キリストの誕生が実現するのか否かだけを、大きな不安の中で問いかけている。キリストが誕生するのかどうか、それとは別の輝かしいことがあるのかどうか。大いなる孤独の中でキリストが誕生し、われわれが叫び声をあげる、それ以上の「光輝」があるのか、と「私」は問いかける。

当たり前のことが書かれているようであるが、そうではない。「私」とその同行者「彼」、「彼の女きょうだいマリア・ジョセフィーヌが語る「私の祖父」、そして今は都市の下をブラックストーン川が流れる都市とはどこなのか。「私の祖父」が「製鋼所」で受けた熱を冷やそうとして「転げ回った草地」はどこにあるのか。それが明示されていない。それどころか、「私」や「彼」のいる町がキリストの生まれる町ベツレヘムであるかのように、Ⅳ節全体が描かれているのだ。

この考えに従うと、キリスト教社会を構成する都市や村は、聖夜においてはキリストの誕生するベツレヘムになるのだ。「馬槽に入った幼子キリスト」を「商業主義」だと決めつけたⅠ節との、何と言う違いだろう。「馬槽に入った幼子キリスト」を受け入れる場所はすべてベツレヘムになるのだから、思考の向きは正反対である。この転回こそ、「キリスト降誕の頌歌」が行っている「回心」である。

われわれは「…の環」(“Ring of…”)及び「キリスト降誕の頌歌」(“An Ode on Nativity”)を精読したが、扱う詩は残っている。「手紙5」,「手紙2」,「手紙9」,「手紙10」,「初めてフアン・デ・ラ・コーサの眼で世界を見て」の五篇である。「手紙5」から読解を再開しよう。

iii. 「手紙5」 “Letter 5”

「手紙5」は全体で9頁から成るが (Maximus 21-29), そのうち朗読されたのは、冒頭から1頁半ほどである。そこで語られるのは、グロスターに文化的な読み物が要ると「教養マニア」(“the culture mongers”)は考えるが、本当に必要なものは違うということである。以下の引用をご覧ください。

(夏には、新聞、いま、春には、雑誌)

[中略]

この季刊誌を

手に取る者はいないだろう

新聞を読む習慣が

(それに、おそらく「ナショナル・ジオグラフィック」を見るのが)

この町の教養の

限界

[中略]

夢にも思わなかった

この上まだ

読み物が要るとは。

[中略]

糞の役にも立たないのは

住民の無知を嘆く

教養マニアの文句。しかし、ああ！

住民のなんと美しく、なんと無限であることか！

考えてみるがいい、どんなことになるのか

(聖サンタ・

クロースよ！ 人びとが

ああ！ 最新流行の物をどれほど必要としているのか、

心を痛めているのかを、可哀そうな

子供たちのために

1

グロスターの某季刊誌編集者へ。きみをじろじろ見る眼はあっても

ブラウン百貨店のショーウィンドーの中を(その陳列品を)覗く眼はない。

待合所でバスを待つ間、退屈しのぎに、きみの雑誌の表紙をじっと見る者はいない

(Maximus 21-22)

本当に必要とされているのは、子供たちに買ってやるクリスマスの贈り物なのだ。つまり、町の住民が必要としているのは、今以上の教養ではなく、お金だとマクシマスは語っているのである。

冒頭行の「夏には新聞」は、夏の間特別に発行される新聞『ケープ・アン・サマー・サン』(Cape Ann Summer Sun)を指す。「春には、雑誌」は、グロスターの詩人ヴィンセント・フェリーニ(Vincent Ferrini, 1913-2007)が編集していた雑誌『四つの風』(Four Winds)のことである。以下、「季刊誌」と「雑誌」は、『四つの風』を指し、「グロスターの某季刊誌編集者」はヴィンセント・フェリーニを指す。

したがって、引用した箇所は、詩人のヴィンセント・フェリーニに対して、こう言っていることになる。あなたは季刊誌『四つの風』を発行することがグロスターのためになると思っているけれども、そうではない。誰も、あなたの出した『四つの風』は読まないし、表紙さえ見ないだろう。住人が必要としているのは、子どもにクリスマスの贈り物を買ってやるためのお金なのだ。また、住民に教養を身につけさせようとする必要はない。彼らは、今のままで、「美しく、無限」なのだ。

このようにして、フェリーニを諭すのが、「手紙5」なのである。それは、冒頭から「手紙5」の終りまで一貫しており、6節から7節、8節を経て最終9節に至る箇所(Maximus 27-29)は、フェリーニをからかう調子で書かれている。詩やグロスターにとって大切なことが何かを見誤っている後輩詩人に対して、道を誤らずに進むよう揶揄するような調子で助言をしているのである。目的が真面目なものであるだけに、率直に語るだけでは面白みがなくなる。からかう調子は、尊敬する詩人に対して助言を与える自分の立場に照れていることから生じたものだ。パークリーでは朗読していない箇所であるが、8節を結ぶ以下の詩行をご覧いただきたい。

フェリーニよ。

風は四つどころではなく、とてつもなく危険な物だ(書くことと同じく)
嵐の規模は
やって来る方向によって
決まるのだから(書くことだってそうだ
嵐に劣らぬ代物なら

(Maximus 29)

マクシマスが敬意と愛情をこめて3歳年下の詩人を導いている様子が分かるだろう。マクシマスはフェリーニと盟友になりたいのだ。

「手紙2」に移ろう。

iv. 「マクシマスよりグロスターへ 手紙2」“Maximus to Gloucester Letter 2”

「手紙2」は4節で構成され全体で4頁から成るが(Maximus 9-12)、オルソンの朗読が録音されているのは冒頭の7行のみである。録音テープがリールの終わりに達したせいである(Muthologos Vol. I 134)のか、そこで朗読を止めたのかは分からない。また、新たなリールと交換するまでにどの箇所がどこまで朗読されたのかも不明である。確実に録音されているの

は、以下の7行である。

……教えろだって？ ハハッ 笑っちまう！
教えられるものか
泳ぐすべなど

奴が言ったとおりだ。人は

変わりはない。次第に
正体が露わになるだけ。おれとて
同じこと

(*Maximus* 9)

この部分から理解できることは限られているうえに、抽象的である。数え上げれば、他人に教えることのできない技術や能力が「泳ぎ」を代表として語られていることが一つ。二つ目は、人は「変化」するのではなく「正体」が露わになるだけである、という人間に関する洞察が披露されていることである。

二つ目の隠されている事象が明らかになる実例は、「手紙2」の1節から3節にかけて記される。黒人奴隷を隠していた家があったという歴史の醜い面（1節）と、夫婦が互いに秘密を持っており、それを知るのは医師だけである場合（2節前半）の二つの例により具体的に示されることになる。

一つ目の他人には教えることのできない能力は、信じがたいほど有能で勇気のある船長たちの行動や（2節後半）、マクシマスと並んで船を見る気概のある若者の姿（3節）に見いだせる。最終4節は、幼子キリストの代わりにスクーターを抱いたマリア像が、グロスターのそういう男や女を見守っていると結ばれる。以上が「手紙2」の概略である。

「手紙9」を見よう。

v. 「手紙9」“Letter 9”

「手紙9」で朗読された箇所は、正確にはどこからどこまでかは分からない。「手紙2」朗読の最中に録音テープが終わったため、新しいテープに取り替える時間が必要であった。

その間に、「手紙2」が続けて朗読されたのか、「手紙9」の朗読が始まったのかは不明である。「手紙9」全体は4頁からなる(*Maximus* 45-48)が、「パークリーでの朗読」に記されているのは、3頁の途中から4頁最終行(*Maximus* 47-48)である。

責務に逆らっても

おれが従うのは、
国ではなく、
歴史などでは全くなく、
建設することでもなく
花だ、とおれは言いたい。

こう思うのは、
波瀾万丈の出来事よりも
おれには、自然の方が近い
からだ。

本来の目的を超えたどんな目的も抱かない、自己充足行為は
人類の歴史を
大幅に押し進める
アルフレッドらの行為より、
プラムのあり方に近い
(中略)

4

おれは自分の歌をはかる
自分の歌の源をはかる
おれ自身をはかり
自分の力をはかる

(おれは、ぶんぶん音を立てて動き回る。
プラムの木に
気付きもせず、
家の中へ飛び込んで
窓から出られなくなった
蜜蜂のように

蜜蜂のブーンという音が
タイプライターの音を
かき消す)

(*Maximus* 47-48)

「責務に逆らっても」から括弧が始まるところまでの意味は明白である。人為的な物よりも自然に従う方が私の心に叶う、とマクシマスは宣言しているのだ。「花」が自然の代表として用いられていることは言うまでもない。辛酸を舐めた果てに勝利を得、歴史を動かした「アルフレッド大王」の行為よりも、「プラムのあり方」がマクシマスにとっては尊いものに映っている。

マクシマスは、「本来の目的を超えたどんな目的も抱かないプラム」に自分の「歌」や「自分自身」を測る基準があると宣言した。「自然」に与すると宣言したのだが、「自然」の一員である蜜蜂は「プラムの木」に気付かず、「家の中に飛び込んで／窓から出られなく」なっている。蜜蜂のように「ぶんぶん音を立てて動き回る」(“buzz”) マクシマスの「タイプライターの音」(“the rattle of the machine”) が、蜜蜂の羽の「ブーンという音」(“the whirring”) によってかき

消される。自然のあり方と人間の営為が反転するような目くるめく描写である。

「プラム」の原理で生きたいと思っているマクシマスは、「プラムの木」に気付かず部屋の中へ飛び込んで来て出られなくなった「蜜蜂」と同じで、「ぶんぶん音を立てて」動き回ることには出来ても「プラム」の原理で生きることには出来ない。「蜜蜂」と「マクシマス」は、「プラム」の生き方が出来ない点では同じなのだ。だから、タイプライターを打つ音が蜜蜂の立てる音によってかき消されるのはマクシマスにとっては心外かもしれない。「プラム」の価値を知り、「プラム」を基準にして生きようとしているマクシマスの努力をあざ笑うかのように、蜜蜂は「プラムの木」に気付かず、マクシマスの部屋に飛び込んで、仕事の邪魔をするのだから。

しかし、マクシマスはそれほど苛立ってはいないようだ。蜜蜂の羽の音でタイプライターの音が「かき消される」ことに、諦めのような満足を感じているらしい。「プラムの木」に気が付かず家の中へ飛び込んで（マクシマスの仕事場の）窓から出られなくなっている蜜蜂の現状は、マクシマスに「プラム」の在り方に近づくことの出来ない現在の状態を教えるからだ。「マクシマス」が、「プラム」を理想としながら、実際は「蜜蜂」と近いことを思い知らされているところにユーモアと謙虚な現状認識がある。

理想は理想として持ちながら、挫折を肯定する考え方がここにあると言ってよい。なりたい者には、なかなか成れないのだ。こうした現実をゆったりと受け入れているのが、蜜蜂の羽音によってタイプライターの音がかき消される時間なのである。

「手紙10」を見よう。

vi. 「手紙10」 “Letter 10”

「手紙10」は、全文が朗読されている（*Maximus* 49-51）。以下に記すのは抜粋である。

ジョン・ホワイトにつて／鱈^{たら}、アイナメ、干し鱈^{フアジョン}について

建国について—ピューリタニズムのためだったのか、
それとも、漁業のためだったのか？
(中略)

1

先ずは、漁業だった。ピューリタニズム（ナウムキアグ）は、その後だ。だから、コナントは

ピューリタニズムと関わるのを嫌って、ベヴァリーへ、バス・リヴァーへと居を移した。

関わりたくなかったから

(おれも知っている、後の時代に生まれたコナントは、正反対。大いに
関わった)

ロジャー・コナントの最初の家、ステージ・フォートにあったあの館が、何よりの証拠。

エンディコットが、先ずやったのは、

自分の屋敷として使うために、あの館をセーレムに移したこと。大きな館で、
骨組みは実に頑丈で見事、昔の建築術ならではの館だ

(中略)

コナントの館は

チューダー様式だった

グロスターよ、最初に建ったお前の家は、イングランドの
エリザベス朝様式だったのだ
(中略)

3

エリザベスが死ぬと
チューダー王家は、ジェームズの手
(その素早さは、コナントの館を
セーレムへかっさらった素早さ
(中略)

学問を墮落させたのは、後代のコナント。祖先のコナントは、
チューダー様式の館を後にし、漁業も止めて
一切合切をエンディコットに委ねた。植民地を
腑抜けどもの親玉に
引き渡したわけだ

4

(中略)
地元優先方式を
廃止した後

ハーヴァード大学には金があふれ
学長も濡れ手で泡(「うすら馬鹿」
呼ばわりされたのだ、町の公立学校出の
学生は)ピカーの秀才を送ってくれと
オレゴン州に依頼して
ハーヴァード大学を駄目にしたのは学長コナント

ロジャー・コナントは、破滅をもたらした男ではなく、破滅させられた男、
(中略)

わがコナントの
移住先は ただの「^{ベガリー}乞食村」
セーレムの気取った奴らは一勝った奴らだ—
ベヴァリーを軽蔑してそう呼んだ。だが、そこは、今でも
(自動車でルート1Aを走る時や、列車で行く時には
わたしの故郷の
始まるところ

(Maximus 49-51)

「手紙10」に、『マクシマス詩篇』で一番大きな主題が記されている。その主題とはアメリカの建国が何のために行われたかである。一般には、政教一致の国を創ろうとした清教徒がイギリスからメイフラワー号に乗って、新大陸に渡り、プリマスで植民地を作ったのがアメリカの始まりと考えられている。上記引用では2行目の「ピューリタニズムのためだったのか」がその考えに対応する。

引用3行目の「それとも、漁業のためだったのか？」は、一般にはあまり考えられることのないアメリカ建国史である。しかし、実際は、引用1行目に登場するジョン・ホワイト (John White) が、イギリスでドーチェスター・カンパニー (the Dorchester Company) を組織し、新大陸アメリカを漁業プランテーションにしようとしたのが、建国の始まりだった。彼が、アン岬に植民地を築いたのは1623年である。しかし、この年よりはるか以前にアン岬を漁業プランテーションにしようという考えはあったのだ。

だから、1節で「先ずは、漁業だった」と言うのは正しい。ナウムキアグ (Naumkeag) はセーレムの古名であり、ロジャー・コナント (Roger Conant ca. 1592-1679) はドーチェスター・カンパニーがアン岬へ入植した時の初代総督である (1623-26)。プリマスに植民したピューリタンとグロスターに植民した漁師たちとの「漁業足場」をめぐる争い (Maximus 116) を、コナントが見事に仲裁したことは「手紙11」の冒頭で称揚されている (Maximus 52)。

コナントがグロスターを後にし、ベヴァリーへ移り住んだのは、「ピューリタニズムと関わりたくなかったから」である。この説明の後、2節となるはずのところが3節となっている。順序通りに進まない人間の思考を示すためか、1節の次が3節になっている。

3節では、コナントのチューダー様式の館を、後任のマサチューセッツ湾植民地 (the Massachusetts Bay Colony) 初代総督ジョン・エンディコット (John Endecott, ca. 1589-1665) がセーレムまで「かつさらった」。コナントは、「漁業も止めて／一切切切をエンディコットに委ねた」ことが語られる。それとともに、コナントの末裔が「学問を墮落させた」とも語られている。その実際については、4節に詳しい。

4節では、コナントの末裔ジェイムズ・ブライアント・コナント (James Bryant Conant, 1893-1978) がハーヴァード大学学長としてどのような許しがたいことを行ない、「大学を駄目にした」のかを糾弾している。「地元優先方式を／廃止し」全米から優秀な学生を集めると共に、経済的にも大学を潤わせた手口が、マクシマスによって槍玉に挙げられている。

ロジャー・コナントは後継者エンディコットによって裏切られ、自分自身の末裔ジェイムズ・ブライアント・コナントによっても裏切られた。ロジャー・コナントは、立派な理念と手腕を持っていたが、ピューリタニズムと関わりを持ちたくないと考えたために、アメリカ史の中では敗者として位置づけられた例なのである。敗者に対する侮蔑を端的に物語るのは、コナントの移り住んだベヴァリー (Beverly) を、「セーレムの気取った奴ら」が「乞食村」 ("Beggary") と呼んだという事実である。アメリカ史の中で勝者となったピューリタンが、ピューリタンでない者を思うさま侮蔑しているのだ。

しかし、ベヴァリーは、マクシマスの「故郷の／始まるところ」なのである。そこはグロスター同様、プリマスのピューリタンとは信条がちがう。ピューリタニズムはもちろん、ピューリタニズムによる建国の神話にも異を唱えるのが『マクシマス詩篇』の中核をなすのである。

では、最後に朗読された「ファン・デ・ラ・コーサの眼で世界を見て」に移ろう。

vii. 「初めてファン・デ・ラ・コーサの眼で世界を見て」 “On first Looking out through
Juan de la Cosa’s Eyes”

この詩は全文が朗読された (*Maximus* 81-85)。以下に抜粋を記すが、要点は漁場としてのアン岬の価値をヨーロッパの漁師たちが早くから認識していたことである。

ベハイムの地球儀には一新世界がまったく描かれていない
(中略)

1

だが、サン・マロー港や
ビスケー湾一帯、それにブリストル港の
漁師たちが、どれほど
長いあいだ、話題にしてきた
ことか—
(中略)

(漁師たちは
ラズ岬を知っていた

(わが町の、わが二つの町の、男たちが
話す時、ガデス市や、キャッシュ岩礁の
話題になると、男たちは

パン屑やビールを使って
テーブルに、指で
沿岸図を描いたものだ

とはいえ、ラ・コーサが出るまでは
誰も世界地図を
手に入れる術がなかった

2

(中略)

カリュプソーはヘラクレスに筏の作り方を教え、杉を与えた

それに、素晴らしい品々も。そんな彼女を後にして、ヘラクレスが旅立てたのは
ひとえに神々の思召し。とはいえ、固く心に誓ったことを片時たりとも忘れはしなかった。
カリュプソーにもらった食べ物には決して手をつけまい、神々の衣はまとうまい、
人間の食するものだけを食べるのだ、と
身にまとったのは

諸国の王と

漁師らが
大西洋に惹きつけられたのは
ちょうどこの頃
(中略)

II

だが、^{たら}鱈はいたのか？ ^{ザ・ニューランド}新たな土地は、
初めから、名前までも
^{パカラオス}鱈の土地

ほら、^{ノルデ}北の海を、霧の中から
(ピシアスの軟泥の中から

(中略)

^{ティエラ・ド・}鱈の
^{パカラオス}国が、海の中から

現われる マサチューセッツよ
わがニューファンドランド人たちよ
わがポルトガル人よ。おまえたちなのか

(それともヴェラツァーノなのか

奇妙にも、その地を
^{マッド・バンク}泥の浅瀬と記したのは

(中略)

ニューファンドランドを知ったヴェラツァーノは
そこを^{テラ・ノヴァ}新たな土地、あるいは^{リモリュー}鱈の国と記した
コルテ・レアルだけが知っていた土地だ
(中略)

おまえを見つけたのは誰なのか、

強い風の吹きすさぶ

土地よ？

1

地球のことを、コロンブスはこう言った、
洋梨の形だと。あるいは、
女の乳首のような突起をもつ
丸い球で、この突起のところが
最も高く、したがって、空に
一番近い、と

船が表わすのは
決まって、大資本の投下と乗組員の募集、それに
支払う賃金

フナクイムシの仕業だった
1492年のこと。たった一度の航海で
船体は穴だらけになった（「虫に
あけられた穴で、船は
蜂の巣のようになった
と報告されている
(中略)

2

(中略)
(4670名もの漁師が、海で死んだと確認された。アニスクウォム川から
海へ出て行く潮に、毎年八月、夏の盛りに
人々は花を投げる。花々は、運河の流れに運ばれて
港の水路に着き、そこから出て行く

いくつもの花束が（グロスターでは、花屋の売値で花を買える人は、わずか）
漂って

出て行くのが見えるだろう

大西洋へ

Ⅲ

死者が残スノハ

ラ・ヴェリテ
真 実

ノミ

序、1節、2節、Ⅱ、1節、2節、Ⅲという構成になっているので、序の後の1節、2節を前半の1節、2節、Ⅱの後の1節、2節を後半の1節、2節と呼ぶことにする。

序の「ベハイム」とはマーティン・ベハイム（Martin Behaim, ca.1436-1507）のことである。ベハイムは、1492年に現存する最古の地球儀であるニュルンベルク地球儀（the Nuremburg globe）を作ったが、この地球儀には新大陸は全く描かれていない。序は、そのことへの言及である。

前半の1節で言及される「サン・マロー（St. Malo）港」は、フランス北西部にあり、イギリス海峡に面する港町。15世紀から16世紀にかけてブルターニュの漁師が、ここから北アメリカ沿岸に向かって船出した。「ビスケー（Biscay）湾」は、スペイン北部にある。ここからバスク人の（Basque）漁師が船出した。「ブリストル（Bristol）港」はイギリス南西部の港町で、この地の商人が新世界探検を奨励した。すなわち、フランス、スペイン、イギリスの漁師たちは、北アメリカの漁場に強い興味を持っていたのである。

「わが町の、わが二つの町の」は、上述の「サン・マロー港」、「ビスケー湾一帯」、「ブリストル港」のうち、どれが二つを指すと考えられる。そういう場所の男たちが、スペイン南西部にあり大西洋に臨む「ガデス (Gades) 市」すなわちカディス (Cadiz) 市や、アン岬の東80マイル地点にある漁場「キャッシュズ岩礁 (Cashes Ledge)」の話になると、「パン屑やビールを使って／テーブルに、指で／沿岸図を描いたものだ」とマクシマスは語る。「ラズ岬」(Cape Raz) すなわち、ニューファンドランドのレース岬 (Cape Race) を知っていた漁師たちは、北アメリカの沿岸に、強く想像力を掻き立てられたであろう。

フアン・デ・ラ・コーサ (Juan de la Cosa, ca.1460-1510) は、1943年に「ニーニャ号」(the *Niña*) の船長としてコロンブスとともに航海し、ベハイムの地球儀とは異なる、新大陸の入った世界地図を作った。ラ・コーサの地図によって、ヨーロッパの漁師たちが夢に描いていた漁場としての北アメリカがくっきりと浮かび上がる。ここまでが前半の1節である。

前半の2節は、『オデュッセイア』の物語と酷似している。ここでは、オデュッセウスの原型とされるヘラクレス (Hercules) がオデュッセウスの代わりを務めている。2節の元になっているのは、以下のようなオデュッセウスの行動である。カリュプソーは、自分と一緒にいてくれるなら、オデュッセウスを不死にしようと考えていた。しかし、オデュッセウスは故国イタカ (Ithaca) へ帰ることを決意した時、人間であることを選び、神々の食物を食べないことに決めた。嵐で筏が転覆した時、オデュッセウスはカリュプソーにもらった重すぎる衣服を脱いで、生きながらえることができた (Butterick, *Guide* 119)。

しかし、ヘラクレスやオデュッセウスの航海はギリシャ時代であるのに対して、「諸国の王と／漁師らが／大西洋に惹きつけられた」のは、17世紀前半である。また、ヘラクレスやオデュッセウスは地中海の英雄で、大西洋とは無縁である。したがって、前半の2節にも、「キリスト降誕の頌歌」で見た、異なる時間と空間の接続がある (本論74-75頁参照)。「頌歌」では、キリストの降誕する聖なる瞬間に、語り手や読者の生きる時空が接続された。ここでは、語り手や読者の生きる時空とは直接結びつかない、異なる二つの時空が接続されている。

すなわち、オデュッセウスやヘラクレスの生きる神話世界の時空と歴史的事実の時空が接続され、両者は大胆に融合されている。その結果、神々のようにではなく、人間として生きることを決意し、カリュプソーの許から旅立ったヘラクレス (オデュッセウスの原型) は、人間として生きる必要から「大西洋に惹きつけられた」かのように見えるのだ。

Ⅱは、鱈の漁場として名高いニューファンドランドが、「^{ザ・ニューランド}新たな土地」であり、名前に「鱈」が入った「^{バカラオス}鱈の土地」であることを寿ぐように描かれている。「^{ノルデ}北の海」から、「霧の中」から現われるのはニューファンドランドなのだ。そこは、紀元前四世紀のギリシャの探検家ピシアス (Pytheus) がイギリス諸島最北のチュール (Thule) で体験した「陸と海と空の境がなく、その三つが軟泥となって混じっている」(Butterick, *Guide* 94) ところである。ニューファンドランドは、そういう所から現われる。すなわち「^{ディエラ・ド・バカラオス}鱈の国」は、「海の中から」現われるのだ。

ニューファンドランドは、それほど高い価値のある場所なのである。それを「^{マッドバンク}泥の浅瀬」と呼んだのは、誰か。「マサチューセッツよ／わがニューファンドランド人たちよ／わがポルトガル人たちよ」と語り手は続けざまに問い、「それともヴェラツァーノなのか」と考え込む。ヒエロニムス・ダ・ヴェラツァーノ (Hieronymus da Verrazano) の兄弟ジョヴァンニ (Giovanni, ca. 1485-1582) はイタリアの船乗りで、1523年から翌24年にかけて、フランスのために北アメリカ大西洋岸を探検した。ジョヴァンニの探検に基づいてヴェラツァーノは地図を作成したのである (Butterick, *Guide* 120)。その際に、ニューファンドランドを「^{リモ・リョー}鱈の国」と名付けた。

ニューファンドランドは、「コルテ・レアル（Corta Real）だけが知っていた土地」とも書かれている。ポルトガル人の船乗りガスパー・コルテレアル（Gaspar Cortereal）あるいは、ミゲル・コルテレアル（Miguel Cortereal）のどちらか一方が、1500年から1502年の間にラブラドル海岸とニューファンドランドを発見したが、二人とも死亡した。まず、ガスパーが探検途上で行方不明になり、次いでこれを探しに出かけたミゲルも死亡した（Butterick, *Guide* 121）。「強い風の吹きすさぶ／土地」は、語り手が人間の利用を拒む大自然の威厳に圧倒されていることを示す詩句である。

後半の1節は、峻厳な自然の姿ではなく、人間にやさしい慈母のような自然の姿を見せる。コロンブス（Christopher Columbus, 1451-1506）にとって地球は、「女の乳首のような突起をもつ／丸い球で、この突起のところが／最も高く、したがって、空に／一番近い」のである。航海とは、地球を愛撫することであると言わんばかりのコロンブスの快楽の言語に続くのは、航海を資本主義経済の原理で見る経済言葉である。コロンブスの快楽の言語は、経済言語によって正されるだけではない。航海には必須の船そのものがフナクイムシのせいで穴だらけになり、コロンブスの企図は挫折させられるのである。「虫に／あけられた穴で、船は／蜂の巣のようになった」。

1回目の航海でコロンブスは、大西洋を横断して香料の豊かな東インド諸島への新航路を開こうとした。スペインの後援で1492年8月3日にサンタ・マリア号（the *Santa Maria*）、ニーニャ号（the *Nina*）、ピンタ号（the *Pinta*）を率いて、スペイン南西からカナリア諸島に向けて出港した。10月12日にバハマ諸島（the Bahamas）のサン・サルバドル島（San Salvador Island）に上陸。キューバ（Cuba）と、ヒスパニオラ（Hispaniola）すなわち西インド諸島の島を発見して帰国（Desk *Encyclopedia* 291）。これが第1回目の航海である。コロンブスは新大陸に向けて更に3度の航海を行なったので、合計4度航海したことになる。

地球を「女の乳首のような突起をもつ／丸い球」と語ったのは、3度目の航海の時である（Butterick, *Guide* 122）。この時、コロンブスは、南アメリカを認め、トリニダード（Trinidad）すなわち、西インド諸島南東部の島を発見した。とはいえ、2度目の航海の際に植民地としたヒスパニオラでは生活環境に対する入植者の不満がつり、その事実がスペイン本国に知れた。その結果、コロンブスは総督としての地位を失い更迭された。コロンブスは恥辱のうちにスペインに戻ったのである（Desk *Encyclopedia* 291）。快楽の言語など語っている場合ではない。

フナクイムシの被害を受けながらも果敢に航海を続けインドへの道を開こうとしたのは4度目の航海の時である（Butterick, *Guide* 123）。ただし、東インド諸島への道は開けず、中央アメリカ沿岸のホンジュラス（Honduras）に出た。そこから東へ向かいパナマ（Panama）に至った。この最後の航海から、2年後には人々から忘れ去られ、コロンブスは極貧の中で生涯を終えた（Desk *Encyclopedia* 291）。

後半の1節には、コロンブスの生涯が、その意気軒昂な時期から、フナクイムシなどに悩まされ、詩テキストには書かれていない事情によって状況が悪くなっていく時期までが描かれているのだ。

後半の2節に描かれているのは、それまでに海で死んだ漁師を弔う行事である。グロスターを貫流するアニスクウォム川の潮が、グロスター湾に出て行く場所から、「夏の盛りに／人々は花を投げる」と、 「花々は、／運河の流れに運ばれて／港の水路に着き、そこから出て行く／（中略）／大西洋へ」。こうして広大な海の墓に、人々は花を手向けるのだが、花束については、このように注記してある。「グロスターでは、花屋の売値で花を買える人は、わずか」

と。海に手向けられる多くの花束は、花屋で買うのではなく、自分で作るのだ。それを海に投げる。漁師の生活がつつましいと同様、遺族の生活もつつましい。

海で死んだ漁師を弔う記念日の行事で、運河に架かった橋から海に花束を投げる様子は、「トウリスト」“Twist” (*Maximus* 89-90) にも、また「マクシマスからグロスターへ、7月19日、日曜日」“Maximus, to Gloucester, Sunday, July 19” (*Maximus* 157-59) にも描かれている。これら後続する2篇の詩では、海で死んだ漁師を弔う記念日の意味がそれぞれに語られるのだが、「初めてファン・デ・ラ・コーサの眼で世界を見て」で語られる記念日の意味は、「花々」が「大西洋へ」出て行くところにあるだろう。前半の第2節には、当時のヨーロッパ「諸国の王と／漁師らが／大西洋に惹きつけられた」と記されていた。そして、オデュッセウスと彼の原型であるヘラクレスが神話の中から顔を出して、自分たちの舞台である地中海ではなく、大西洋に惹きつけられたように描かれていた。

つまり、「初めてファン・デ・ラ・コーサの眼で世界を見て」は、大西洋を謳う詩篇なのだ。新大陸の発見とそこでの活動は二つある。一つは、ピューリタンの理想である政教一致の世界を作り、それと共に商業主義から資本主義へ移行していく活動である。もう一つは、イギリスのドーチェスター・カンパニーが始めた新大陸における漁業プランテーションの構築である。後半第2節で前景化されている、海で死んだ漁師たちに花束を手向ける行事は、漁業プランテーションを構築しようとしたアメリカ建国の始まりに向かって行われているのだ。一人一人の家族の死を悼むことが、アメリカ建国の歴史に直結する。

Ⅲは、3行の英語混じりのフランス語で書かれている。ヴォルテール (Voltaire) が1719年にM・ド・グルノンヴィル (M. de Grenonville) に宛てた手紙の文句「人は生者に尊敬を負い、死者に真実のみを負う」(“…on doit des égards aux vivants, on ne doit aux morts que la vérité”) の後半に英語を入れたものが詩のテキストとなっている (Butterick, *Guide* 124)。“On ne doit aux morts nothing / else than / la vérité”である。意味は「人が尊敬されるのは生きている人のおかげであり、真実のみを知るのは死者のおかげである」だ。すなわち、「初めてファン・デ・ラ・コーサの眼で世界を見て」で語られてきたことは、すべて死者が示した真実によるのである。

Ⅱ. 七篇の詩が向かうところ

七篇の詩の中心主題を以下に記す。その際に、詩の核心部にある(1)二つの概念の連結・交錯・変換・接続箇所(i-iv)と、思想(v-vii)が語られる箇所をゴシック体で示す。

第Ⅰ章で精読した七篇の詩の中心主題は以下のようであった。

i. 「…の環」

海の波から生まれた美しい女神が、ゼウスを始めとする神々の中でも最も醜い軍神マルスと愛を交わすところに高いものが低い者のところへ降りてくる主題が見いだせる。**美の世界と醜の世界が、女神とマルスの形を取って連結されるのだ**。二人の間に生まれた子供が、弓に秀でていることは戦の神の息子に相応しい。女神が「イルカ」をギンバイカで飾り、「言葉」をもギンバイカで飾る箇所は、**カテゴリーの異なる物が連結される場面**である。前者は想像できて、後者は想像を絶する。

新たな物語が展開されて然るべきところであるが、物語はここで終わる。それは、二つの世界を連結する実験が、まだ始まったばかりであることを示すだろう。

ii. 「キリスト降誕の頌歌」

Ⅱ節の3連から6連では、「私」と「私」の同行者である「彼」との世界に記憶の蘇りが起こる。「彼」の「母」を埋葬した後、「私」と「彼」とその「女きょうだいジョセフィーヌ」は、レストランで「カキ」を食べる。その時、ジョセフィーヌは、「私の祖父」が「製鋼所」の熱と戦った姿を目に見えるように語る。「彼」の家族と「私」の家族との住居が近いために、「彼」の家族と「私」の家族との思い出が交錯する。「彼」の母の葬儀は、「私」の父と母の結婚した教会で執り行われ、「私」が「彼」とともに自動車で行って行った通りは、「父に連れられて、初めてキャップを買ってもらった通り」だと判明するのだ。交錯するのは、「彼」の家族と「私」の家族との歴史なのである。(二つの家族の歴史が交錯する)

Ⅱ節の7連では、人称代名詞の「あなた」が詩の進行につれて意味を変える。「あなた」は「私」の同行者「彼」から、幼子キリストに変わる。(「彼」と幼子キリストとが一瞬交錯する)

いつでも、そして今、再び、この新しい年に
あなたが生まれた場所は、たとえ都市でも、鐘の音が鳴り響いている

上記引用の「あなたの生まれた場所」はベツレヘムにある馬小屋の馬槽を指す。これは、幼子キリストの誕生を告げる鐘の音が常に鳴り響いていることに感謝する詩句なのである。

Ⅱ節の最終3行「娘の二度目の／ 誕生日は／どんなふうだろう？」には、一歳になった娘の来年の誕生日を思う「私」の姿とともに、「馬槽の中の幼子キリスト」が娘の「誕生」を祝っているという感覚が、ここに描かれている。(聖なる世界と「私」たちの生活空間である俗なる世界が「娘」を介して連結されている)。

Ⅲ-Ⅳ節は、「少年」である「私」と、「娘」の父親になっている「私」とが同一の時空に存在している様を描いている。(「少年」である「私」の時空と、「娘」の父親である「私」の時空が連結されている)。「私の祖父」が「製鋼所」で受けた「火」の熱を冷やそうとして「転げ回った草地」で少年の「私」は転がる。材木会社の火事で馬が火に焼かれる様と「祖父」の火による苦しみが重ねられる。「私」や「彼」の家族の歴史、少年である「私」と娘の父である「私」、そして「祖父」の火による苦しみ、キリスト降誕の意味と重ねられる。Ⅰ節では、「馬槽に入った幼子キリスト」は「商業主義」だと決めつけられたが、このⅢ-Ⅳ節では、「幼子キリストの降誕」を受け入れる村や町はすべてベツレヘムになるという大きな転換がある。聖なる場所と「私」や「彼」そして「娘」と「祖父」の生活空間が接続されるのである。

iii. 「手紙5」

詩人のヴァンセント・フェリーニを論している。君はグロスター住民が文芸季刊誌『四つの風』を必要としていると思っているようだが、違う。必要としているのは、子どもにクリスマスの贈り物を買ってやるお金だ。また、住民に教養を身に付けさせる必要はない。彼らは、今のままで、「美しく、無限」なのだ。

「手紙5」全体が、フェリーニと盟友関係を結ぼうとするマクシマスからの申し出であると共に、住民に教えようとするのではなく、住民から学ぶべきだという意識転換の要請がある。

iv. 「手紙2」

冒頭に書かれているのは、肝腎な事は教えられないことと、人は「変わる」のではなく、「正

体が露わになる」ことである。両者が言っているのは同一のことである。すなわち、人はその人になるべき者になって行く。そのなり方は教えられない。立派な船長になる者もあれば早くから気概を見せる若者もいる。聖母マリア像が「じっと見ている限り」グロスターの「男と女の中には／奮い立つ者がいる／聖母の要求にこたえて」と結ばれる。

聖なるものが俗なる者を見守る点では、「キリスト降誕の頌歌」と同じである。

v. 「手紙 9」

マクシマスは、「本来の目的を超えたどんな目的も抱かないプラム」に自分の「歌」や「自分自身」を測る基準があると宣言した。しかしマクシマスは、「プラムの木」に気付かず部屋の中へ飛び込んで来て出られなくなった「蜜蜂」と同じで、「ぶんぶん音を立てて」動き回することは出来ても「プラム」の原理で生きることが出来ない。「蜜蜂」と「マクシマス」は、「プラム」の生き方が出来ない点では同じなのだ。「プラム」を理想とするマクシマスを「蜜蜂」と重ねあわすところに、この詩のユーモアと謙虚な現状認識がある。理想は理想として持ちながら、挫折を肯定する考え方がここにあると言ってよい。なりたい者には、なかなか成れないのだ。

vi. 「手紙10」

ドーチェスター・カンパニーがアン岬へ入植した時の初代総督ロジャー・コナントの生涯が、アメリカ建国史の縮図となる。すなわち、漁業で始まったはずのアメリカは、ピューリタニズムのために建国された国となり、商業主義および資本主義と歩調を合わせて利潤追求を是とする体制を作って行く。この体制に乗りきれない者は敗者として侮蔑される。建国の目的が漁業からピューリタニズムに変化し、大規模な資本の動きによって、「アメリカ」も「世界」も呑みこまれるに至るのだ (Maximus 76)。

vii. 「初めてフアン・デ・ラ・コーサの眼で世界を見て」

この詩は、まだ世界地図にアメリカ大陸が描かれていない時代から始まる。アメリカ大陸が発見され、新大陸で漁業が始まると、海難で死ぬ漁師たちが出てくる。漁師を弔う記念日に、人々が運河に架かる橋からグロスター港へ花束を投げると、花々は「大西洋へ」出て行く。大西洋を謳うこの詩篇で、海難で死んだ漁師を弔う行事は、漁業プランテーションを構築しようとしたアメリカ建国の始まりに向かってなされている。

Ⅲ. 朗読と朗読の間

オルソンが聴衆に向かって語ったことをすべて述べる余裕はない。しかし、最も重要だと思われることを3点に限り指摘しておきたい。1点目は、詩論と取るべき発言があること。2点目は、詩論でありながら、その場の状況を伝える発言があること。最後の3点目は、明快な立場の宣言があることである。詩論でありながら状況を伝える部分にはメタ・リーディングと言える発言が含まれていることに注意されたい。

上記3点について略述する。掲げる頁は『ミュソロゴス』の頁である。

(1) 詩論として読める発言：1, 2 前半, 3 参照。

1. 「詩学は政治だ」(“poetics is politics”) (112)

2. 「手紙 5」を読んでいる時に, “beauty is difficult” や, “paradise is not artificial” などより

大切なことがあると語る所 (121)。ここで挙げられている「美は難かしい」や「天国は人口のものではない」は共にエズラ・パウンド『詩篇』(Ezra Pound, *The Cantos*) 中の『ピサ詩篇』(*The Pisan Cantos*, 1948) に表われる詩句である。パウンドは「美」や「天国」を重要だと考えたが、「手紙5」はもっと重要なことを語っているという意味である。

オルソンは語りの部分を“oral poetry”だと言う。その見解にギンズバーグが賛成している (122)。これは、朗読であるのにオルソンが詩を読むことよりも語ることを重要視していることに対する、ギンズバーグの賛意の表明と解釈できる。

3. [I]f the human race doesn't think that its politics is as accurate as its poetry, there is no society, and the only individuals are poets. 人類が自分たちの政治を詩と同じくらい正確であるべきだと思えないなら、社会などというものはなくなり、個人といえるのは詩人だけになる (127)。
4. 自分の夢と同じになろうとするのが詩人だ。本とは社会の中の愛だ (129)。詩人の役目とは何かをオルソンが語ったものである。ビートの詩人と共通する意見に思える。

(2) 詩論であり、かつ朗読の場の状況を伝える発言：1, 3 参照。

1. 「詩を読んでくれ」という声に対して、オルソンは詩を読もうと読むまいと詩人は詩人だと切り返す。相手が怒ると、オルソンは次のように説明する。詩人は、生と口と詩でできている。ならば大地 (earth) は、われわれのものだ。「われわれ」(us) とは、“I feel like a kid. I'm in presence of an event” なのだと語り、さらに続けて言う。“I feel like crazy today. I feel like young; younger than the young” と。また、会場から去る人たちも出てくると「最良の人は残っている」と言う [笑い] (111)。
2. 今後私は変身する。オルソンでいるのは長すぎたと語り、正しい行いについてギンズバーグから教えてもらおうと語る [笑い]。世界がギンズバーグ、オーロフスキー、コースなどといったバロウズの手下の支配下に置かれるのをグロスターで耐えているのは面白くない。わたしだって力が欲しい。[笑い] (133)。

オルソンが場の雰囲気の中で発言しているのがよく分かる箇所である。ギンズバーグに生き方を教えてもらおう気持ちはないと思われるが、その場にいる人たちの中にビート作家を支持する人が多いだろうと見ての演技ととらえるべきである。「わたしだって力が欲しい」は、ビート作家がもてはやされる時代に、自分ひとりがグロスターで取り残されていることに対する半ば本気の発言であると考えられる。

3. ロバート・ダンカンや、エド・サンダーズはどこにいったのか、オルソンは頼りなげだ。しかし、自作の詩に対して次のように語るメタ・ポエトリー的な部分がある。『マクシマス詩篇』の第一歌「ほく、グロスターのマクシマスから、きみへ」は、男性原理 (phallic principle) で書かれているから嫌いだ。大切なのは「中間態」“middle voice”で、それをウォルプ (Wolpe) が教えてくれた (136) という箇所である。

ロバート・ダンカンはこの朗読会でオルソンを聴衆に紹介した人物であり、エド・サンダーズは友人である。そういう支えになる者の姿が見えなくなると不安になり、壇上から呼びかけるオルソンの姿はこの箇所だけでなく、別の箇所でも見られる。

生身のオルソンは、その時々感情を露わにするだけでなく、自分の作品に対する感情をも露わにしているのがこの箇所である。『マクシマス詩篇』第一歌が、男性原理で書かれているから好ましくないと言うのだ。自作の詩に対して批判している点では、この箇所をメタ・ポエトリーだと思えることができる。しかしそれ以上に、自分で書いた詩が気

に入らないなら書き換えれば良さそうなのである。

「ばく、グロスターのマクシマスから、きみへ」を書いたのは1950年頃である。その時と現在の1965年では、時代の空気が違う。男性原理よりも母性原理の大切さを書き込まなければならないと、オルソンは考えたのかもしれない。『マクシマス詩篇』中の「チュロス人の仕事」(“Tyrian Business”)で指摘していた「中間態」(Maximus 40)の重要性をこの場で語るのも、朗読会の雰囲気には押されたためかもしれない。「チュロス人の仕事」における中間態の記述は以下のようである。

こう言ってやるがいい。おむつはみんな
大地の息吹きで
木にかかったのだ、と(音楽家の言う
ミドル・ヴォイス
中間態だ。

おむつを木にかけ仕事は、人が行なうのが通例だが、ここでは風が人のする仕事をしてくれた。それを「中間態」と呼んでいるのである。能動でも受動でもない行為の在り方が「中間態」と呼ばれている。ピアニストで作曲家のステファン・ウォルプ(Stefan Wolpe, 1902-1972)によると、中間態によって音楽は音楽になるという。

4. 2種類の天使がいる。「書く天使」と「語る天使」だ。ソクラテスは語り、プラトンは書いた(142)。「書く」はオルソンが詩人として書くことを指し、「語る」は朗読する、および朗読の合間に語ることを指している。

この朗読会で、オルソンが詩人として自作の詩を読むならば「書く天使」の側におり、語るならば「語る天使」の側にいると説明しているのだ。そして、「ソクラテスは語り、プラトンは書いた」と宣言するのなら、オルソンは語る場合にはソクラテスのように語り、書く場合にはプラトンのように書く、と言っていることになる。それだけではない。語る方が書くよりも優位にあると主張していることになるのだ。

オルソンの発言は、すでに書いた詩よりも、現在の自分の気持ちを語るという点では朗読会の意義を高めることになるのだが、書いた詩を詩人本人に読んでもらうという朗読会の趣旨を逸脱する可能性もあることに注意しておこう。メタ・リーディングのつもりで行なったことが、その場の雰囲気に流された奇矯な振る舞いに終わる危険もあるのだ。

(3) 明快な立場の宣言：反資本主義体制宣言である。1, 2 参照。

1. 「手紙10」を朗読した後に拍手が起こる。それは、「手紙10」が明確なメッセージを持っているからである。ピューリタニズムによって、商業主義へ、次いで資本主義へと移行していくと、アメリカは墮落し救いようがなくなる、という強いメッセージが聴衆に伝わるのである。メッセージを伝えるマクシマスと、自作の詩篇を読むオルソンとが、聴衆の心を完全に掴んだ瞬間である(140)。
2. 市場やお金に興味を持つ連中には、お金を与えてやってもよい。いや、私(オルソン)はむしろ、忌々しいお金を壊したい(145)。

IV. 聴衆の体験

第I章では、会場となったホイーラー・ホール(Wheeler Hall)で朗読された七篇の詩の精読を試みた。どのような内容の詩が朗読されたのかを、まず確かめておく必要を感じたからで

ある。第Ⅱ章では、これら七篇の詩が向かうところを再検討した。オルソンが朗読に選んだ詩の選択基準は何かを、選択された詩の構造から知ろうとしたのである。第Ⅲ章では、朗読と朗読の間にオルソンが語った内容を、散漫にならない範囲で可能な限り掘り上げた。

さて、オルソンの朗読を聴いた聴衆は、どのような感覚や知識や感情が自らの内部に蓄積されて行くのを感じただろうか。あちらへこちらへと主題の軸が移って行くように見える朗読と、朗読間の話に、何らかの中心があったのだろうか。つまり、聴衆はどのようにオルソンの朗読を体験したのか。

それを知るためには、朗読会会場での聴衆の反応を見れば良いと誰もが思うだろう。しかし実際には、どの朗読の後にも拍手が起こり、当該箇所に関するオルソンの解説や、詩一般についての信念が述べられるので、朗読された詩の一篇一編がどのように受け取られたかは、正確には分からない。「拍手があった」、「質問が出た」といった程度のことは分かるのだが、聴衆の心の中で起こるドラマは分からないのである。

客観的に分かることと言えば、朗読の合間にオルソンが友人や知人の詩人に向けて語りかけることがしばしばあり、そういうやり取りの中では男女の交友に関する話も大いに出たことや、朗読が予定より長くかかったために退席する聴衆もいたし、詩人仲間でも姿が見えなくなった者もいたことをここで述べておきたい。第Ⅲ章(2)の1(本論90頁)にこのことは触れてある。そこでのオルソンの反応は、「最良の人たちは残っている」だったことを思い出そう。

その言葉には、自分を励ます意味合いと、残っている聴衆にお礼を言う意味合いの二つがこめられているが、時間の枠内で朗読を終わらせようという配慮は欠落している。事実、予定の詩を読むのに十分時間があると思っていたオルソンは、午後12時にホールを閉館しなければならないことを聞いて、急いで「初めてファン・デ・ラ・コーサの眼で世界を見て」を読み終えている。愛されたいと願う詩人オルソンの多少恥ずかしい部分を聴衆は、何度も目にすることになった。

オルソンは自作の詩を披露するよりも、自分自身を見せたのだ。それも恰好のいい、立派な詩人としての自己よりも、不恰好なほど大きく、愛を求める我儘な「大きな赤ん坊(“Big Baby”)」(Boer 28-29)の姿を聴衆に見せたのである。その一方でオルソンは、洞察力に満ちた詩によって、聴衆や読者に彼ら自身の立場をはっきりと教えたのだ。最後まで残った聴衆は、オルソンという人物とその詩に、深く心を動かされたに違いない。

参考文献

- Boer, Charles. *Charles Olson in Connecticut*. 1975 North Carolina: North Carolina Wesleyan College P, 1991.
- Butterick, George F. *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*. Berkeley: U of California P, 1978.
- The New American Desk Encyclopaedia*. Third Edition. New York: Signet-Penguin, 1993.
- Olson, Charles. *The Collected Poems of Charles Olson : Excluding the Maximus poems*. Ed. George F. Butterick. Berkeley: U of California P, 1987.
- . *The Maximus Poems*. Ed. George F. Butterick. Berkeley: U of California, 1983.
- , *Muthologos. The Collected Lectures and Interviews*. Ed. George F. Butterick. Vol. I. Bolinas, California: Four Seasons Foundation, 1978.
- チャールズ・オルソン『マクシマス詩篇』ジョージ・F・バタリック編、平野順雄訳 南雲堂、2012年